

大分市美術館

大分県大分市

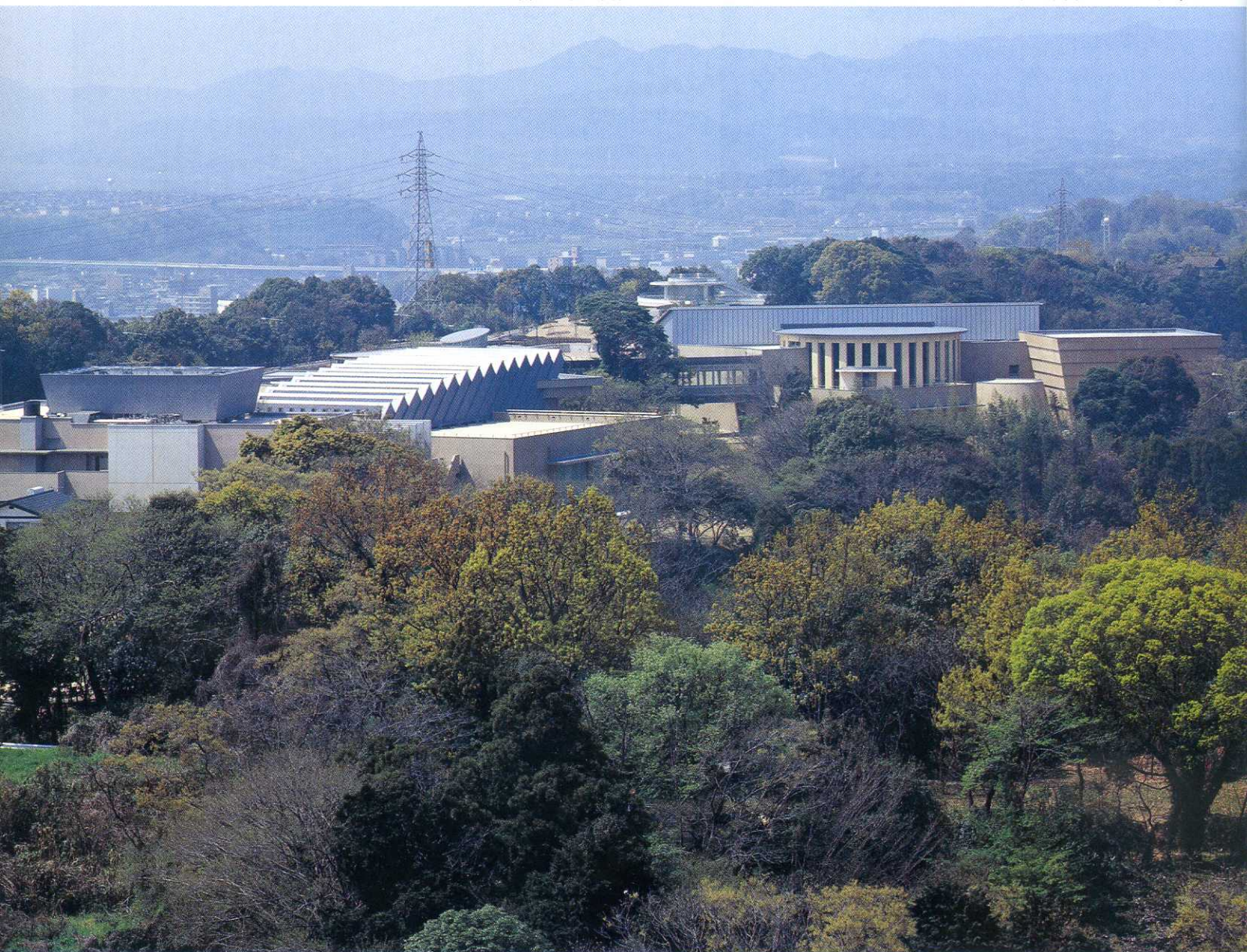
設計 大分市土木建築部建築課 内井昭蔵＋内井昭蔵建築設計事務所

施工 清水建設・佐伯建設共同企業体

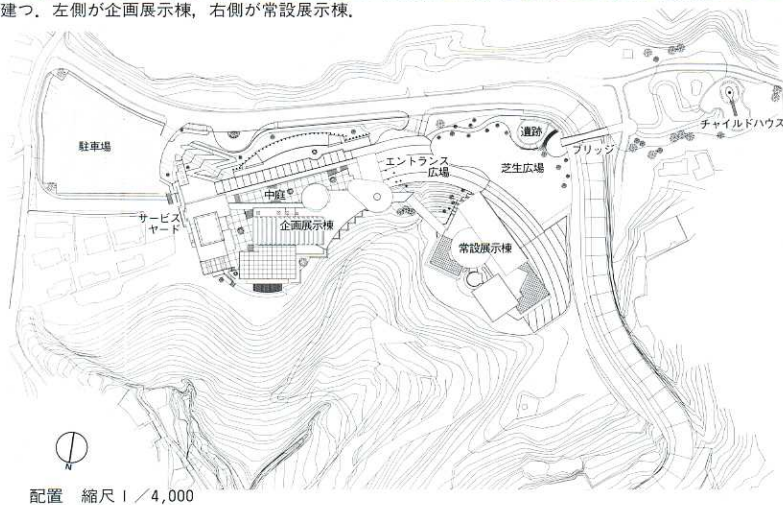
OITA ART MUSEUM

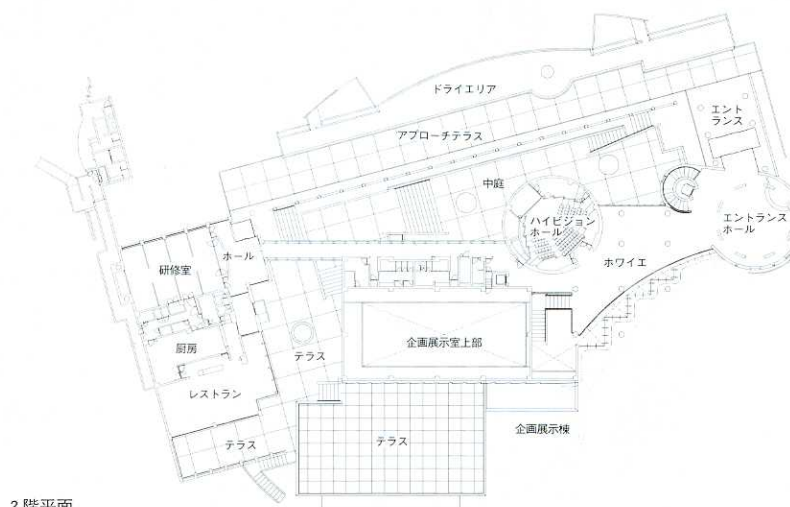
architects : SHOZO UCHII + S.UCHII ARCHITECTS

右頁：企画展示棟ティーラウンジ横の中庭。外壁は珪藻土掻落し。ティーラウンジ柱は諫早石ソフトビシャン。

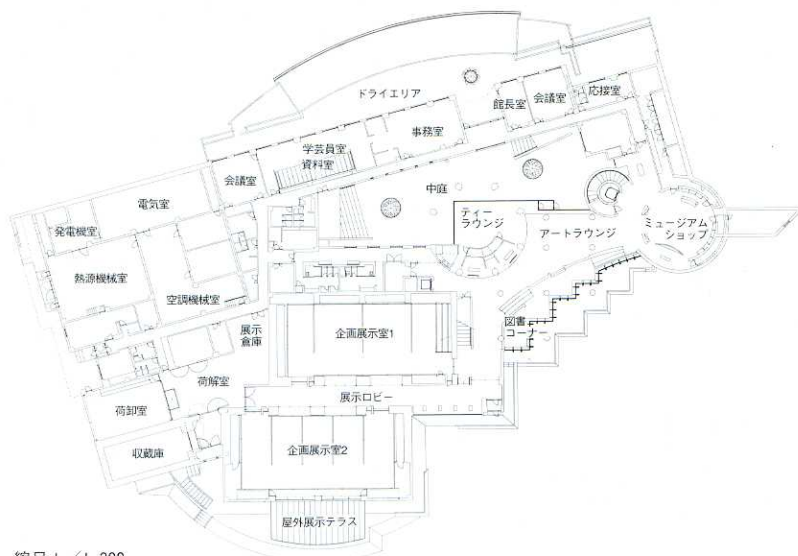


北側外観。大分駅近くの上野丘公園の中に建つ。左側が企画展示棟、右側が常設展示棟。

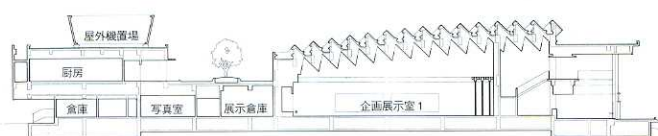




2階平面



1階平面 縮尺 1/1,200



企画展示棟断面 縮尺 1/1,000



常設展示棟断面 縮尺 1/1,000



企画展示室2横の屋外展示テラス。



企画展示室1。



常設展示棟展示ロビー。



常設展示室1。

吉田鉄郎の経歴

(1894～1956 富山県生)



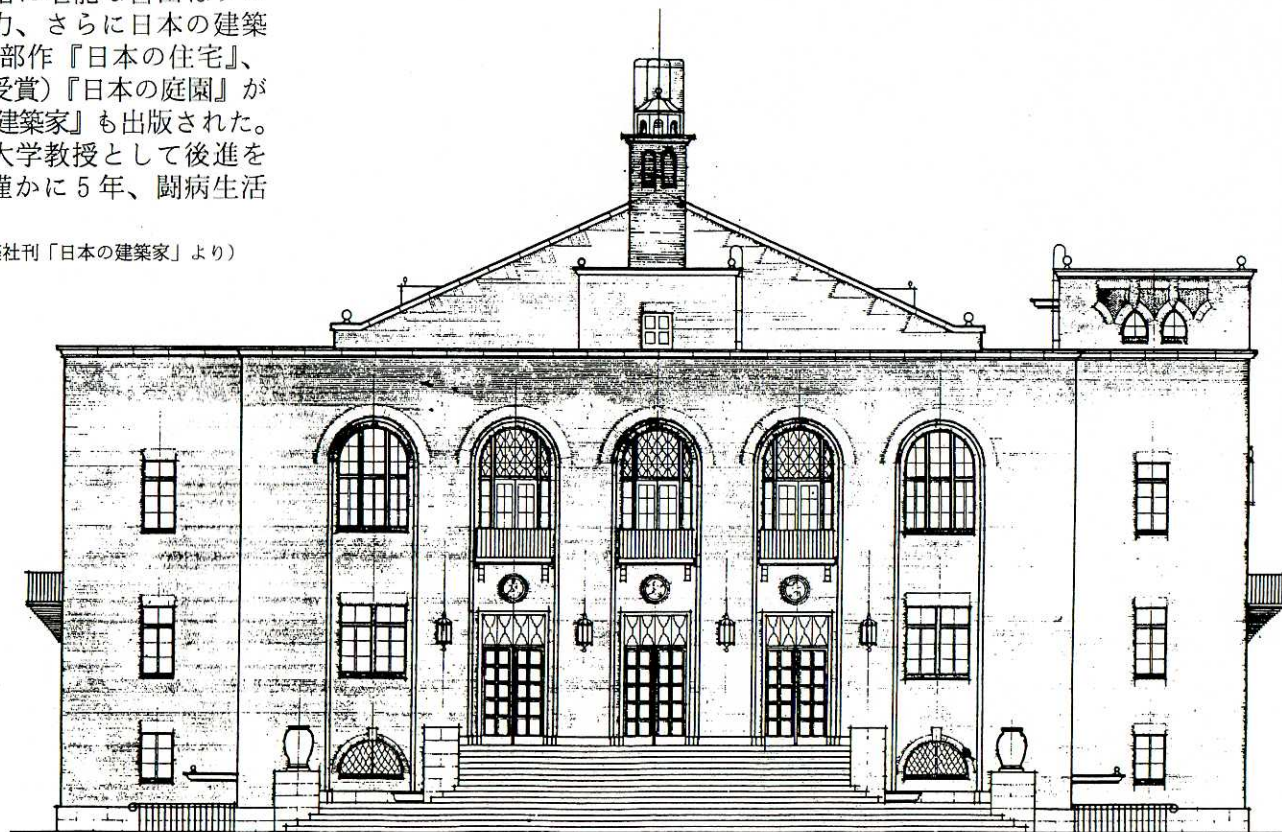
大正8年東京大学卒業。通信省営繕課に入る。初期はドイツのシューマッヘル、北欧の建築家エストベリィらの影響を受け、また京都や宇治山田の郵便局では屋根を被せるなど模索期が続いたが、昭和6年末東京駅前に竣工した東京中央郵便局によって独自の境地を確立。日本の木造建築のもつ簡素で清潔な美を、柱と梁の真壁構造で表現する手法は同14年大阪中央郵便局で頂点に到達。戦後の丹下健三が香川県庁舎に発展させた日本的デザインの祖形となる。ドイツ語に堪能な吉田はブルノータウト来日の際にも協力、さらに日本の建築を紹介する(独文による)三部作『日本の住宅』、『日本の建築』(建築学会賞受賞)『日本の庭園』があり、和文『スウェーデンの建築家』も出版された。

戦後通信省退官後は日本大学教授として後進を育てたが教壇に立ったのは僅かに5年、闘病生活のなかで著作を完成。

(資料提供: 新建築社刊「日本の建築家」より)

元別府市公会堂の設計者

吉田鉄郎建築作品



別府市中央公民館

別府市上田の湯 6-37 / 昭和3年(1928) / 設計 吉田鉄郎
/ 施工 溝口組 / RC造3階
Beppu-shi Chuō Kōminkan
kamitanoyu, Beppu-shi /
Public Hall / Tetsuro Yoshida

東洋のナポリといわれた泉都別府に市制が布かれた施行記念に公会堂の建築を行うことになり、通信省の技師吉田鉄郎にその設計が依頼された。

彼の初期の作品はドイツや北欧の建築家の影響を受けているが、この建物の正面外観も北欧近代建築の名作といわれるストックホルム市庁舎の中庭から青色の広間に入る正面外観と似ている。現在正面玄関の階段部分や裏面煙突部分を撤去し改造している点は惜しまれるが、窓や壁面にアーチを多用し、黄土色のスクラッチタイルの貼り方にも造形的な繊細さが見られる。763人(椅子席)を収容する音響効果のよい大講堂や貴賓室とともに当時泉都文化の象徴として、内外観光客注視の焦点となっていた。県内に現存する鉄筋コンクリート建築としては最も古く、その端正な姿は県内の近代建築の昭和初期を代表する秀作である。

永瀬狂三の経歴

(1878~1955)

永瀬狂三

明治10年10月23日に生まれる。明治39年に東京帝国大学建築学科を卒業し、約半年の間、異端の建築家として今日に名を残す下田菊太郎のもとで働く。その後、明治40年5月に、明治期最大の建築家、辰野金吾と当時大阪の建築界を率いていた片岡安の主宰する辰野・片岡設計事務所に入所し、帝国座の監理にたずさわっている。明治42年3月から京大建築部に勤務することとなり、大正8年10月22日、死去した山本治兵衛の跡を引き継いで建築部長となる。以後、大学組織の改革に伴い、同年12月17日に建築課長、翌9年1月9日に営繕課長となり、昭和4年1月29日まで在職した。この間、大正6年に京大土木工学科、大正9年から昭和19年までは京都高等工芸学校の講師を勤めている。

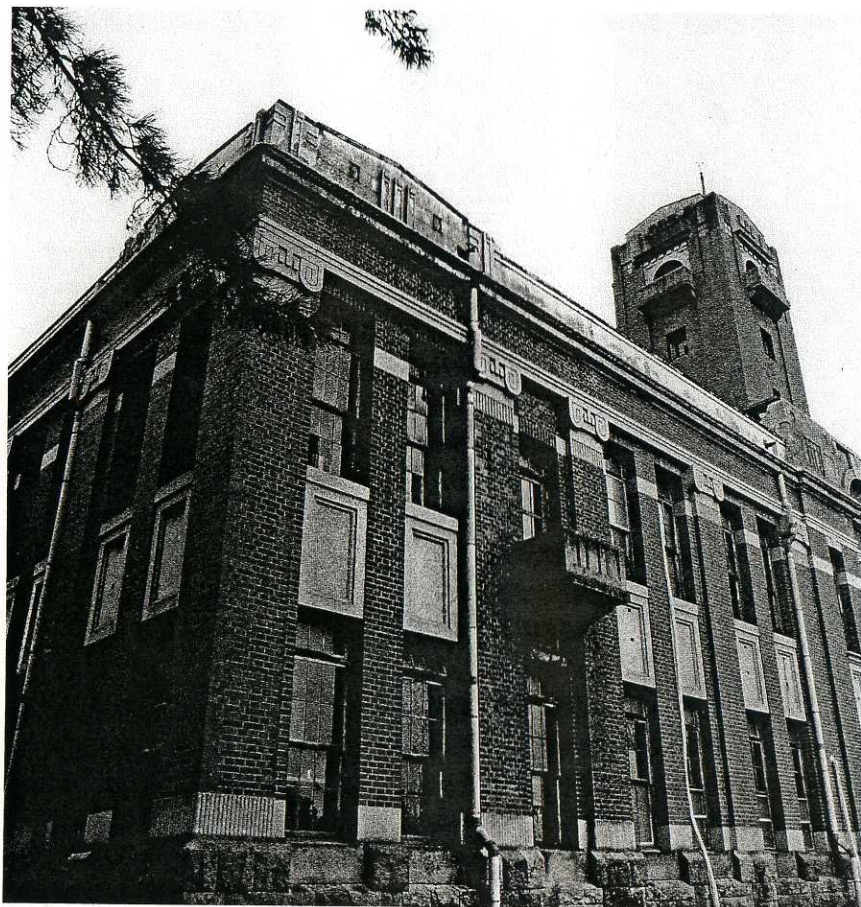
京大退職後は昭和20年まで京都工学校の校長であった。そして、昭和30年1月27日、77才の生涯を閉じている。

京大構内にある永瀬の作品には、京大別府地震研究所、同阿蘇火山研究所などの作品があり、前者の塔を持つデザインはよくまとまっている。また、京大に関係しない作品では、敦賀町庁舎、田原町中部尋常高等小学校、同町立中学成章館、平瀬貝類博物館、板取川電気株式会社、京都成安女子学院などが、わかっている。

彼の活躍した時代は、19世紀末以降登場した新しい建築造型が次第に広まってゆき、様式主義的な建築も細部が簡略化されるなど様式が解体されてゆく時代にあたっている。彼の作品もそうした時代の動きを反映して、大正の後半からは表現派的意匠に接近する傾向を見出さうように思われる。

京都帝国大学営繕課長

永瀬狂三建築作品



京都大学理学部附属地球物理学研究施設

別府市大字別府字野口原／大正12年（1923）
／設計 京都帝国大学営繕課 設計者永瀬狂三
／施工者不詳／煉瓦造一部RC造地上2階、
地下1階／1,412㎡

Kyoto Daigaku Rigakubu-fuzoku Chikyu
Butsurigaku Kenkyu Shisetsu
Aza-Noguchibaru, Oaza-Beppu, Beppu-shi
／Kyoto University Eizen-Ka

別府市野口原の大分県生涯教育センター（旧緑ヶ丘高校）の西側山の手の約5,000㎡の敷地に、塔屋をもつ赤煉瓦造二階建の建物が建っている。

大正6年に京都帝国大学は地球物理学講座を開き、温泉や地熱研究の場所を探し求めて別府町を訪れた。町の協力により土地の無償提供を受け、建築もまた延面積480余坪の内216坪は別府町、153坪は大分県の寄付により、工費20万を費やして大正12年に竣工した。設計は時の営繕課長永瀬狂三で南面する建物は正面中央に階段付き玄関を張り出し、塔屋を中心に右左対称に振り分けた外観は均整がとれ、よくまとまっている。鉄筋コンクリート造の地階は石貼り仕上げで、その上に煉瓦をのせ、大小の柱形をリズムカルに配置し、上下を白い帯で締めている。柱頭のイオニア式オーダーをはじめとする壁面装飾や入口受けの窓回りや階段親柱など細部に表現派的意匠を感じさせる建築である。